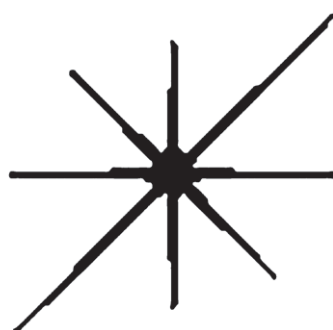


コメット通信 56

[25年3月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

すべてを「ケア」と呼んでしまう前に
田村美由紀——3

【特集 ひきこもりの人類学】
フランスにおいて「ひきこもり」とは何か？
古橋忠晃——5

「ひきこもり」と家族について考える
堀口佐知子——8

ひきこもり臨床とジャネ
蓮澤 優——10

【連載】
なぜ「制度」を「使う」と言わねばならないか？：ガタリとリングスを絡めて考える
——本棚の片隅に 24
三脇康生——12

すべてを「ケア」と呼んでしまう前に

田村美由紀

「ケア」という言葉があふれている。流行っている、と言ってもいい。新聞の見出しで、テレビの特集で、本のタイトルで。わたしたちは、日常的にケアという言葉を見聞きするようになった。それ自体は、けっして悪いことではないと思う。むしろ、これまで見えていなかったこと、あるいは見ないようにしてきたことが、ケアという言葉によって可視化されただけだ。あふれているのは、言葉だけではない。ケアそのものが、わたしたちの日常生活にはあふれている。

ケアの重要性が見直されるようになった契機として、しばしば指摘されるのが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックである。他人との接触機会を減らすためにテレワークが推奨される状況のなかで、医療従事者や、介護・保育の現場で働く人びと、交通や物流などの生活インフラを支える労働者など、エッセンシャルワーカーの過酷な労働状況が浮き彫りとなった。普段は見過ごされていた無数のケア労働の積み重ねによって社会が機能していることを、わたしたちは痛感した。たしかにそこにいたのに、いないことにされてきた人たち。たしかにそこでおこなわれていたのに、なかったことにされてきた労働。わたしたちの日常に当たり前のよう存在していて、それゆえに軽視されてきた他者を世話し支える営みを、ケアという言葉はあぶり出す。

一方で、自戒を込めて言うならば、ケアを耳馴染みの良い、便利なワードとして多用する傾向があることも否めない。そこでは、ケアの個別具体的な振る舞いに注意が払われるというよりも、むしろそれは、他者を世話し、他者に世話される関係呼びならわす抽象的で曖昧なイメージにとどまっているような気もする。では、ケアという言葉を通して、わたしたちはどのような行為をイメージしているのだろうか。高齢者の介護や障害者の介助、そして育児。これらはおそらく、わたしたちが「ケア」と聞いたときに真っ先に想起する場面ではないだろうか。食事、入浴、排泄など日常生活のサポートは、人間が生命を維持するうえで欠かすことのできないものであり、ケアの根幹に、こうした人間の生理的欲求への応答があることは言うまでもない。しかし同時に、それらは、この社会のなかでおこなわれているケア労働のほんの一部でもある。

たとえば、作家・市川沙央のデビュー作『ハンチバック』（文藝春秋、2023年）の一節に衝撃を受けた人は多かった。

厚みが3, 4センチはある本を両手で押さえて没頭する読書は、他のどんな行為よりも背骨に負荷をかける。私は紙の本を憎んでいた。目が見えること、本が持てること、ページがめくれること、読書姿勢が保てること、書店へ自由に買いに行けること、——5つの健全性を満たすことを要求する読書文化のマチズモを憎んでいた。その特権性に気づかない「本好き」たちの無知な傲慢さを憎んでいた。⁽¹⁾

側弯症という障害を持つ物語の主人公・井沢積華が、紙の本と、その魅力を懐古主義的に語る読書文化そのものへの呪詛を吐く場面である。この痛烈な一節は、読書というありふれた文化が、実は健全者中心主義の思想のもとで成り立ってきたことを暴き出す。自身も主人公と同じ重度障害の当事者

である市川は、第169回芥川賞受賞の際の記者会見でも、電子書籍の普及など「読書バリアフリー」の推進を訴えた。分厚い紙の本を読むことが、障害を持つ人にとってどれほど大きなハードルとなるのか。読書バリアフリー、すなわち「読むことのケア」は、点字や音声図書といった書籍の形式の多様化や、朗読サービスなどの読書支援という形でこれまでもおこなわれてきた。しかし、『ハンチバック』の言葉が読者に強いインパクトを与えたように、読書が困難である人びとのニーズはまだ十全に満たされておらず、それに関わるケア労働もほとんど等閑視されている。なるほど、たしかに紙の本を読むことに不自由しないばかりか、そのフェティッシュな魅力に浸ることを許された「健常者」たちは、自らの「特権性」に無自覚なまま、「読むことのケア」を自分には関係のないものと切り離して、読書行為に没頭してきたのかもしれない。

文学は、ときにわたしたちが言葉という不完全な器で取りこぼしてしまった物事の細部を、別の言葉で掬い取ることを可能にする。ケアに対する社会的な関心が高まっている現在、すべてを「ケア」と呼び、一面的であやふやなイメージへと塗り込めてしまう前に、いまだわたしたちが感知できていないかもしれない、見えないケア労働に目を向け、ケアという言葉の内実を豊かに耕していくことが必要だろう。文学の表象は、ケアという言葉のその一歩先を想像するための、ささやかながらも重要な手立てとなるはずだ。

注

- (1) 市川沙央『ハンチバック』文藝春秋、2023年、pp.26-27。

執筆者について——

田村美由紀（たむらみゆき） 1990年生まれ。現在、神戸女学院大学文学部総合文化学科専任講師。専攻＝日本近現代文学。主な著書には、『口述筆記する文学——書くことの代行とジェンダー』（名古屋大学出版会、2023年）がある。

【特集 ひきこもりの人類学】

フランスにおいて「ひきこもり」とは何か？

古橋忠晃

フランスにおける二つの臨床活動

筆者は、フランスに一年のうち5カ月ほど滞在して、主として二つの臨床活動を行っている。一つ目は、2017年以降、ストラスブール大学医学部附属病院で臨床観察医としての資格を得て、フランスのセクターのうちの一つのストラスブール南部のエリアを、閉じこもりなどの理由で病院に自発的に来院することが困難な患者の訪問を医療心理センター（Centre Médico-Psychologique）の看護師と共に行き、フランスのひきこもりと直接対話してきた。ひきこもりは根本的に自ら治療を求めて病院に出向くことが少ないので、こちらから本人の家に出向くという方式（しかも、大抵のフランスのひきこもりは「先生のほうから来てくれるなら会ってもよい」と思っているようである）はとても有効である。この訪問の詳細については、筆者の論文⁽¹⁾を参照されたい。

二つ目の臨床活動としては、ストラスブールにあるフランス依存協会（ITHAQUE。アルコールや薬物などや、最近ではインターネットなどの依存を治療するフランスの公的医療施設）で、筆者の助言のもとに「回り道（Détours）」（この窓口の前身は「物質への依存」を主に扱っていた）という名称のひきこもり家族相談窓口を現地のスタッフと共に立ち上げたところ、フランス各地から「ひきこもり」を身内に抱えた家族が次々と相談に訪れるようになった。現在は筆者がフランスに滞在している際に、ひきこもりの相談を担当している相談員のスーパーヴァイズを定期的におこなっている。この窓口の詳細については、筆者の論文⁽²⁾を参照されたい。

以上の臨床経験に加えて、これまでにフランスを中心とした各地に招かれて開催してきた、精神科医や心理士、看護師、一般医、大学教員、高校教師などの専門家向け、あるいは一般市民向けの講演会での質疑応答をリソースにして、フランスにおけるひきこもりの対応のあり方を練り上げてきた。筆者の勤務先の名古屋大学とフランス北東部のストラスブール大学には、大学間協定の教員招へい制度があり、2011年にストラスブール大学に客員教授として派遣されて以降、2025年3月現在までに、フランスで講演のためパリの他14の町を訪問した。

日仏における「ひきこもり」という言葉による経験

「ひきこもり」という言葉が1980年代に日本で出現したときには、状態を指す言葉であった（例「彼は自分がひきこもりという状態にある事実を受け入れている（Il accepte le fait d'être en état de Hikikomori）」が、現在は人を指す言葉（例「それこそ『ひきこもり』たちが社会的退却という行動において表現していることである（C'est justement ce que les Hikikomori expriment dans leur acte de retrait social）」）としても用いられる。つまり、ひきこもりとは、言語によって規定される経験であると言ってもよいのである。

それでは、フランスでは「ひきこもり」という言葉はどう経験されているのであろうか？ ここ数年で、フランスにおける筆者の市民講座では、聴衆から以下のような質問を受ける機会が増えてきた。「私の甥は5年程前からひきこもりなのです（Mon neveu est Hikikomori depuis cinq ans）。彼には何が起きているのでしょうか（Que lui arrive-t-il ?）」つまり、フランスにおいても、日本と同様に人を指

ず言葉になってしまっているのである。例えば、「私の甥は癌である (Mon neveu a un cancer)」と言うときには、所有の動詞 avoir を使い, être は使わない。一方、「ひきこもり」について言うときには、(Mon neveu a un Hikikomori) と表現することはなく être を使って表現するので、Hikikomori はあくまで「状態」であって、癌のような「病気」ではないという本来のひきこもりの言葉の意味と一致していると言える。だが、ここ数年で、フランスにおいても、日本と同様に、「彼はひきこもりです (Il est Hikikomori)」という言葉による経験をあまりに頻繁に、そして日常的にすることによって、「彼は～という存在である」とまるで全人格的にそう表現しているかのような属詞の使われ方をするようになってきた。

そもそも、フランスでもひきこもりという言葉が人を指すようになる前は、いわゆるひきこもりが自分の状態を言い表す場合には「私は自分の部屋にひきこもっている (Je me retire dans ma chambre)」と言い、親が自分の息子がひきこもっている状態を例えば私のような精神科医に対して言い表す場合には「息子が自分の部屋にひきこもっている (Mon fils est cloîtré (enfermé) dans sa chambre)」と言うことが多かった。いずれにしても、ひきこもりの親というものは、何らかの原因があって息子がひきこもりを余儀なくされていると考えるので、息子の状態を受動形で表現していたのである。フランスのひきこもりの本人たちが、受動形ではなく、再帰動詞で自身の状態を表現するのは、あくまで彼らの状態は能動的な行為によるものであり、同時に、その目的語は、主語と同じ人物、つまり、他ならぬひきこもり自身であるからだ（「私は自身をひきこもらせている」）。このように、言葉による経験の次元において、フランスのひきこもりはすでにポジティブなのである。ポジティブと言ったが、彼らが自身のひきこもりの状態を楽観視しているという意味ではなく、自分の意志で主体的にひきこもっていると彼らが考えているということである。しかし、そうは言っても、ひきこもりとして偽物というわけではない。筆者の役割は、精神科医として、医学のディスクールの内と外の境界に立ちながら、臨床の中でこれらの言葉がどのような意味を持っているのかを考えることにある。

以上のように、日本を出自とする症候群の一つの名でもある言葉が、フランスにおいて、既に一つの文化として根付きつつある。その現象を臨床的な現場で注視しつつ、そこから得られた成果を日仏両国の医療や文化へと還元していくことは、日本の医療や文化にとっても重要なことであると筆者は考えている。

注

(1) 以下の媒体に掲載した論文を参照。

古橋忠晃「堂々とした「ひきこもり」——フランス Hikikomori 事情 1」ふらんす, 4: 68-69, 2020。

古橋忠晃「日本の精神科医を受け入れるフランスのひきこもり——フランス Hikikomori 事情 2」ふらんす, 5: 60-61, 2020。

古橋忠晃「フランスの「ひきこもり」はどこにひきこもるのか?——フランス Hikikomori 事情 3」ふらんす, 6: 60-61, 2020。

古橋忠晃「フランスの「ひきこもり」の親たち——フランス Hikikomori 事情 4」ふらんす, 7: 60-61, 2020。

古橋忠晃「confiner か se retirer か——フランス Hikikomori 事情 5」ふらんす, 8: 60-61, 2020。

古橋忠晃「サンドローム・ド・ディオジェーヌ ——フランス Hikikomori 事情 6」ふらんす, 9: 62-63, 2020。

古橋忠晃「フランスにおける「ひきこもり」の臨床活動と理論的実践を通して」臨床精神病理, 40: 247-254, 2019。

- (2) 古橋忠晃「フランス・ストラスブールにおけるひきこもりの家族相談窓口の現状報告」日仏医学, 43(1); 60-75, 2022。

執筆者について——

古橋忠晃(ふるはしただあき) 1973年生まれ。現在, 名古屋大学総合保健体育科学センター准教授。精神科医。専攻=精神医学, 精神病理学, ひきこもりの精神医学, フランスの精神医学。主な著書には、『「ひきこもり」と「ごみ屋敷」——国境と世代をこえて』(名古屋大学出版会, 2023)がある。

【特集 ひきこもりの人類学】

「ひきこもり」と家族について考える

堀口佐知子

2025年3月現在、ロングランとなっている藤野知明氏によるドキュメンタリー『どうすればよかったか?』⁽¹⁾。札幌に暮らす統合失調症の姉とその家族を、弟の視点で20年以上追った作品である。医学部在学中の姉に幻覚、妄想などの統合失調症の陽性症状と思われる言動がみられるようになるが、研究医の両親は姉が統合失調症に罹患していると認めず家に囲い込む。両親の対応に疑問を持つ弟は医療につながる方法を模索し、その一環でカメラを回すようになる。母に認知症の症状があらわれ、父がひとりで対応するのが難しくなったタイミングで、姉は精神病院に入院する。退院後、姉の症状は見違えるほど落ち着き、弟との会話を楽しんだり、外に出かけて買い物をしたりようになる。この作品では、両親が責任を擦り付け合うばかりで行動しないことに対する、監督の無念さが痛いほど伝わってくる。家庭内でのコミュニケーションのかみ合わなさも印象的だ。

この作品で描かれているものは、兄が「ひきこもり」状態となったのをきっかけとして私が2001年から行ってきた、日本の「ひきこもり」支援に関する人類学的調査の中でよく耳にしてきたこととつながっている。「ひきこもり」状態にある本人と家族間のコミュニケーションがなくなってしまうたり、かみ合わなくなったりしてしまうことは、よく「ひきこもり」家族会でも自助グループでも話題に上る。また、子どもに統合失調症の発症が疑われるような症状がみられても、親が統合失調症という診断を認められずに「ひきこもり」カテゴリーにすぎってしまうことがある。「ひきこもり」状態とされてしまうことで、適切な治療の遅れが懸念されるケースだ。「ひきこもり」状態にある者の中には、未診断の統合失調症のケースもあることに留意すべきである、ということが、厚生労働省の「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」においても指摘されている⁽²⁾。

親が認知症などで要介護となったタイミングでようやく年を重ねた子どもが医療・支援につながることも、2010年代より注目を浴びようになってきた「8050問題」に時折みられるパターンと重なる。「8050問題」とは80代の親が50代の「ひきこもり」状態にある子どもを抱え込む状況を指す（川北稔『8050問題の深層：「限界家族」をどう救うか』）。ジャーナリストで「8050問題」の当事者でもある池上正樹氏の家族も、また、支援に何十年もつながることがなかった私自身の家族もそうであったように、問題を先送りしてしまうケースは少なくない⁽³⁾。

社会・医療人類学の視点で「ひきこもり」について研究してきた私は、日本で「ひきこもり」と名指される社会的孤立・就労困難・経済的困窮の現象は複合的であり、日本特有の現象ではないという立場を取ってきた。そもそも社会から撤退している状態の人の数を正確に捉えて国ごとに比較することは難しい。ではなぜ、日本では社会的に孤立し無業状態にある人々が、家族に囲い込まれ続けるのだろうか。日本の家族主義的文化によるという議論もあるが（斎藤環『中高年ひきこもり』）、それだけではないだろう。ものごとを包括的に検討することが人類学では求められるのであり、「文化」というブラック・ボックスに問題を収めてしまってはならない。

2021年より、私が社会学者の関水徹平氏（『「ひきこもり」経験の社会学』の著者）などで行っている協働研究では、長らくメンタルヘルスの問題として扱われてきた「ひきこもり」を、福祉の視点から捉え直すことを試みてきた。日本の福祉制度が家族依存となっているがために社会的孤立が、(た

たとえばホームレスなどではなく)「ひきこもり」として立ち現れることについて、異なる福祉制度を持つドイツ、スウェーデン、英国との比較から検討している。日本では、家族依存の福祉制度によって、「家族内で解決すべき」というイデオロギーが強化されており、その規範を内在化した親世代は、子どもの無業状態に負い目を感じて困り込もうとすることがある。いっぽうで、家族に負担を強いることで、国は都合良く責任を逃れてきている。他国であれば、安定した雇用につけない子どもを抱える親が、支援を十分に行わない国に怒りを向けることもある(キャサリン・S・ニューマン『親元暮らしという戦略』荻原久美子他訳)。今必要なのは、家族が恥じて負担を抱え込むことがないように、孤立無業状態にある人々に対する国の支援を充実させることであろう。

注

- (1) 『『どうすればよかったか?』公式サイト』<https://dosureba.com/> (2025年3月27日アクセス)。
- (2) 厚生労働省(2010)「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」<https://www.mhlw.go.jp/content/12205000/001429801.pdf> (2025年3月27日アクセス)。
- (3) 『『弟はひきこもりの末に亡くなった』ジャーナリスト池上正樹“当事者”として語る言葉』<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230222/k10013985911000.html> (2025年3月27日アクセス)。

執筆者について——

堀口佐知子(ほりぐちさちこ) 1976年生まれ。現在、テンプル大学ジャパンキャンパス教授。専攻=社会・医療人類学。小社刊行の共著書には、『新型コロナウイルス感染症と人類学——パンデミックとともに考える』(共著, 2021年)が、訳書には、『聖なる自己——カリスマ派の癒しの文化現象学』(共訳, 2023年)がある。

【特集 ひきこもりの人類学】

ひきこもり臨床とジャネ

蓮澤 優

私は精神科医で、大学の学校医をしているため、学生のひきこもり事例にはしばしば遭遇する。一言で「ひきこもり」といっても実態はさまざまである。男子学生が修学のゆきづまりから自室にこもってしまい、心配する両親とのあいだでいさかいが絶えなくなっている、といったいわば古典的なケースもあるにはある。しかし他方では、一人暮らしのアパートでひきこもり続けている人もいるし、また、実家暮らしであっても家族関係は非常に良好で、ただ社会参加だけがまったく進まない、というような人もいる。本人の心理状態もまちまちで、顕著に抑うつ的になっている人もいれば、ほとんど葛藤なく淡々としているように見える人もいる。

1990年代に「社会的ひきこもり」という概念が出てきた当初は、一種の家族病理として語られることが多く、親子間の葛藤や思春期心性に焦点が置かれていた。しかしながら上述のとおり、そうした典型からは外れるようなケースも現実には多い。近年では中高年者のひきこもりが増加しており、もはや必ずしも思春期の問題ではなくなっている。さらにまた、ひきこもりは、かつては日本の社会慣習や家族文化に特異的なものと見なされ、土居健郎の「甘え」論が援用されたりもしたが、今日では世界のさまざまな国に共通した問題として認識されるようになってきている。

このように、ひきこもり像が拡散、多様化してきているいま、親子関係や思春期課題に関する従来の（主として精神分析的な）議論とは異なった観点から、その心性についてあらためて検討がなされるべきかもしれない。それは何も、まったく新しいひきこもりの心理的モデルを打ち立てる、というようにことを意味しない。むしろ、ある概念について見直すときにはつねに古典に立ち返り、過去に蓄積されてきた精神現象のさまざまな記述を、あらたな視線で読み直してみるべきではないだろうか。

今回私が注目したいのはピエール・ジャネ（1859-1947）である。彼は、神経症の一種である精神衰弱に伴って生じてくる「社会無力症 *aboulie sociale*」について論じている。精神病圏の深刻な病理の結果として、社会生活が営めなくなるという事態についてはもちろん、ジャネ以前にも古い文献はいくらかもある。しかしジャネの場合、神経症レベルの反応によって社会関係からの全面的撤退がもたらされるといふ微妙な機序を記述しており、ひきこもりを考えるうえで興味深い。

社会無力症と呼ばれる状態は、身体の病気や、あるいは情動混乱をもたらすような何らかの出来事に続いて生じてくる。「次第に彼らは仕事をしなくなり、他人と争うことをあきらめ、外での生活から身をひいて、いろいろな交際を断ってしまう⁽¹⁾」。こうした状態は長期にわたり続くこともある。とはいえ、彼らは必ずしも厭世的というわけではなく、むしろ他者から愛されることを狂おしく求めている。にもかかわらず一切の社会参加ができず、「閉じこもり *des renfermés*」になってしまうのである⁽²⁾。

なぜこうしたことが起こるのか。ジャネによれば社会的行為——すなわち他者の前で、その反応や感情を考慮しながら遂行される行為こそは、心的生活における最も複雑な機能にほかならない。それゆえ、ある種の人たちは、疲労したときに強い「貧困感」を覚えて心的エネルギーの極端な節約術に走り、社会活動からいっさい身を引いてしまうのである⁽³⁾。

このような機序に関して、ジャネはさらに踏み込んで、より厳密に経済論的な観点から分析を進め

る。彼は、「心理力」と「心理張力」とを区別する。「心理力 *force psychologique*」とは心的エネルギーの総量のことである。これに対して「心理張力 *tension psychologique*」は、心を統合して複雑な機能を遂行する能力を意味する。この用語法に則っていえば、社会無力症の人は心理力が低下しており、これが貧困感として感じられるのかもしれない。けれどもその結果、対人交流や社会参加をいっさい放棄するという極端な儉約を行い、そこから抜け出せなくなっている。そのとき、本当の問題は、むしろ心理張力低下の方にあるかもしれないのだ。

この見極めが何より重要である。心理力が欠乏しているのなら安静、休息が必要だが、心理張力が低下している場合には、逆に刺激によってこれを高めてゆかねばならないのである。心理張力の向上とは、しかし、具体的にはどのようにして可能になるのか。ジャネは行動療法的な介入を提案している⁽⁴⁾。彼は何よりも、個々の行動の完遂を重視する。治療者は、患者にとって現時点で可能な行動を見極め、それを最後までやり通せるように訓練する。このとき、やり遂げたという達成感を本人が明確に実感できることが重要である。一つの行動ができるようになったら、より複雑な行動課題に移る。このようにして心理張力を漸次回復するのである。

社会無力症に関する以上のようなジャネの議論は、ひきこもりの機序や治療的介入について考えるうえで、興味深い視点を提供するものであるといえよう。たしかに、彼の理論は高度に経済論的であって、このように少ない紙幅でまとめてしまうと、もしかしたらやや冷たい印象を与えるかもしれない。しかし実際には、ジャネは決して抽象的次元で理論体系を構築しているわけではなく（抽象的思弁もまた、彼にいわせれば精神衰弱の一徴候である⁽⁵⁾）、つねに多数の緻密かつ具体的な症例記述とともにこれを展開している。こうした記述のゆえにこそ、ジャネの仕事は、ひきこもりのような今日の問題を考えるに際しても、繰り返し立ち戻るべき豊かな洞察の源泉となりうるのである。

注

- (1) *Les névroses*, Paris, Flammarion, 1909, p. 357. (『神経症』高橋徹訳, 医学書院, 1974年, p. 328.)
- (2) *Ibid.*, p. 84. (同書 p. 77.)
- (3) *La médecine psychologique*, Paris, Flammarion, 1923, p. 154-155. (『心理学的医学』松本雅彦訳, みすず書房, 1981年, p. 145.)
- (4) *Les médications psychologiques*, t. III, Paris, Alcan, 1919, p. 249-269.
- (5) *Les névroses*, *op. cit.*, p. 357. (『神経症』 p. 329.)

執筆者について——

蓮澤 優 (はすざわ すぐる) 九州大学キャンパスライフ・健康支援センター准教授。専攻＝精神病態医学、哲学。主な著書には、『フーコーと精神医学』（青土社, 2023年）、*L'autre tour de folie* (L'Harmattan, 2024) がある。

【連載】

なぜ「制度」を「使う」と言わねばならないか？： ガタリとリングスを絡めて考える

——本棚の片隅に 24

三脇康生

Psychothérapie institutionnelle という専門用語に対して、どうも最近は、「制度精神療法」という訳語を定着させてしまう動きが目立つ、これには多賀茂氏と共に私は反対したい。そのためのある患者の思い出を書く。改変して書く。患者には本当の父がない。何回聞いても、この辺りの構造はよくわからなかったが、話しているうちに話している方が混乱するからか、時代状況にお呼びがつかないからか、おそらく患者の母はどうも大きな港の芸者らしく数人の子供がいるようだが、それぞれの父親は異なっているようだった。お前のお父さんは戦死したと言われていたが、その後、思春期の時に一度、実の父が会いにきたらしく、ある年長の男性から多くの土産をもらったらしいが、後になりそれが実の父と母から教えられたという。父の空白は埋まらず、とうとうその患者は昭和天皇が地方を巡行した際の記念写真アルバムを手にして、天皇が自分と同じカメラ、そのカメラは前述の男性がくれたものだからという理由で、自分の父は昭和天皇であるという確信に至る。その患者は見目麗しく高校までよく学びよき就職をしていたが、父のように慕った上司が突如事故死し後ろ盾を失った頃から母と衝突が増え暴力的になり強制入院を余儀なくされ、当時の病院では掃除当番が回ってきてもイヤイヤやっていたという。病院でも天皇の子供に何をさせるのかとトラブルになり退院するが母とおりあいは悪いままで、なんとそのまま見合い結婚という形で親と親戚が見つめてきた真面目に働く地味な男性と結婚させられる。この患者を主婦としてしまい夫はそれで仕事に生きようとしたが、天皇妄想をどうしようもなく精神科病院に入院させることになった。以降長期入院が続いている。主治医の私は、迷いながらもついにその妄想の中に少し問いを立ててみた。

「そんなカメラなどは5万人くらいのが持っているかもしれませんよ、あなたはその中のお一人でしょう？」「そうですねか」

「あなたのお父さんはあなたのご主人と似たような方じゃないでしょうか、人間そうかわらないという意味で？」「そうですねか」

これ以上の話の進め方は日本の古い精神科病院ではできなかった。もしもフランスのラ・ボルド病院のやりかたならどうだっただろうか。ここでは精神分析を治療者自身が受けてその上で患者グループに参加するなど、純粹分析と応用精神分析の並走が行われていた。しかしガタリはさらに精神分析自体を歪めようとする。思いつきで描くなら、たとえば、上記の日本の事例に対して病院内でカメラクラブ、写真クラブを立ち上げるだろう。これに患者がどんな風に乗ってくるかはわからないが、少なくともそのカメラの持ち主を可能なら患者と主治医の二人以上にする。これがジャン・ウリヤガタリが好む小集団 (groupuscule) である。その反対の大集団の代表としてガタリが挙げるのは各国共産党で、その中央集権的的疾病により大衆運動に悪しき影響を与えている。しかし一方の極左集団の猪突猛進ぶりにも、「陰謀家的」スタイルにも期待はできないとガタリはする。(『精神分析と横断性』, 邦訳, p. 201-204) ガタリは陰謀論者になることを嫌がった。ではどうするか。集団を縮小すること、縮小された集団を作ることである。これがまずは制度である。しかも単に行政が用意するものを縮小させていることに気がつけたい。このことで「自己自身の幻想化作用を十分に統制することが

でき、それを過渡的な幻想——すなわち仮定された歴史的有限性の痕跡をとどめている幻想——の状態にまで縮小することができるような主体—集団」（同上、p. 302）を作ることによって支配的な集団幻想に変形されてしまうことを回避できる。カメラを持つ集団を作れたら、天皇にもらったとしても取り敢えずカメラ談義、写真談義になる。しかし余計なものを持ち込ませない日本の病棟のシステムではこのカメラが持ち込みにくかったりする。盗難も恐れられている。私が主治医をしていた患者も「いいわね、あなたには「本当」のお父さんがいて」と言い別の患者は「でももうそんなもの死んでいる」と応えるだろう。これに近い反応は日本での絵画クラブでは存在した。そこで「嫌ではない笑い」が生じるから不思議だ。この笑い得る主体こそをまずは立ち上げようとしたのだから、今の多くの研究者が日本語として通りが良いから使う制度精神療法という訳語ではなく、多賀茂氏と私が主張する制度を使う主体が立ち上がるのを待つ/いや使う主体を立ち上げていく精神療法（「制度を使う精神療法」）として考えられていることに注視したい。

のちにガタリは、主体といえばラカンの想像界から象徴界への移行の際に現れる可動性の主体、そんな言語に締め付けられたラカンの主体の変形すら嫌うようになり、その結果、オートポイエーシスなどにも近づき、その結果、随分と日本人なら親しみやすい立場に立っているとも言えるが、歴史修正主義的翻訳語の選択には手を貸せない。シェリングの時代には、ロマン主義的な電気ではないが、ガタリが対抗する精神医療は電流を患者に流していたことを忘れてはいけない。一挙に直してしまおうと電流を流されないように、電気ショックのただの（つまり具象であり抽象ではないということだ、抽象機械なら *abstrait* の *ab* が効いて繋がらずコンセントを外すはずだからだ）機械に繋がれないように「制度を使う」、この「使う」はアガンベンなら次のように記すものだ。「あらゆる使用は両極的な所作である。一方では、自分のものにして習慣化することであり、他方では喪失であり自分のものでなくすことなのだ。使用するとはことは——ここでは、その言葉の意味論的範囲を最も広くとって、狭い意味での使用と習慣となった使用の双方を指している——故国と亡命のあいだで不断に揺れ動くこと、つまり住まうこと (*abitare*) を意味しているのである」（『身体の使用』、邦訳、p. 154）。

アルフォンソ・リンギスは各書物で相当に変化を示す人だが、それを利用させてもらう。「カントは、美の分析においてフォルムと色を分け、色は生理学的な反応につきものの享樂的な快樂に属し、美的趣味とフォルムに対する無心の快であるとした。しかし官能的な快は奪い取り、取り上げる。赤らめた顔を照らし出す蠟燭の光や、黒と紫の絵の具で顔に描かれた魔除けの印は、顔をエロティックな対象に変える。エロティシズムは、肉体の輪郭だけでなく、その中身を感じ取らなければならない。身体の血や分泌物は唇のなかに、乳白色の肌の色のなかに、そして目という暗くみだらな穴の中に見出される。男女を超越したおてんば娘のような形姿のなかに、グレースジョーンズ（略）のような黒い肌や目があり、汗が虹色の光を放っている」（『汝の敵を愛せ』、p. 232）。形だけでなく色に反応できない場合の目が、ガタリの言う転移の政治、沈黙の政治、どんな記号内容も中立化しようとする政治、どんな記号論的凹凸性も解釈学的に超コード化しようとする政治である主体的ブラックホール（『機械状無意識』、邦訳、p. 238）になる可能性がある。この地点でガタリはラカンから完全に離れる。ここで色彩はゲートに従えば、色彩間の動きが大切となる。色彩は受動的マッピングにはあらず、知覚者が創設 (*institutionaliser*) していく主体的なものである。色彩のゲートの主体性無くしてはブラックホールに落ちる。これだけでも貴重な描写だが、リンギスはさらにまるで我々のために明確に次のように書く。「性的興奮はエロティックなイメージを生み出す。みずからの身体の性的快樂にひとり浸る場合、激しくセックスの相手を思い浮かべたり、性的に誘惑されるような状況を想像したりするものだ。そして、わたしたちの腕のなかにありのままの姿でしかと存在している他者とのセック

スにおいては、そのパートナーは変形され、神話化され、その場面はドラマ化される。パートナーは単に女性であったり、男性であるのではない、女狐であり、売春婦であり、女神であり、母親であり、母なる大地なのであり、狼であり、放蕩者であり、イエスであり、北欧神話のトール（雷神）なのだ。取り込みによる複合的な存在が持たらず圧力が、わたしたちの安定化された精神構造が崩壊するのに及んで、官能的なエネルギーを解き放つのである」（『わたしの声』、p.95）。素晴らしい記述であり、これは神経症圏内の人間の主体の奥深くを記述し尽くしている。だがこのような幻想の横断が現実にはできた気がしたとしたら、リングスを書くようにそれは電気ショック療法の危険性のある精神科病棟送りにされた後かもしれない。（同上、p.228）この文章の後半の読解には小さい集団の中での主体的出来事、主体の経験する出来事の位相を変えなければならないのだ。いやそれでは、シニフィアンの前半からシンボルの後半に移動するだけである。だからガタリの言い方のダイアグラムの記号 - 粒子（『機械状態無意識』、邦訳、p.61）、この訳語を、記号 - 特異性と訳し直すならば、上記リングスの記述の形に重きを置いたマスターベーション的記述の部分では形、フォルムに重きが置かれた記述になりがちだから、すでにそこから色彩に重きを置いた記述に変えてしまうことを主体的に試みたいわけである。この時に、幻想の横断という一つの道、うまくいけば倒錯まで行かずラカンの享楽で済み、さらに社会人として生きられる道にも縛られないで、形フォルムに執着して普通なら記述される場面をあえて色、色彩で描くような集団 - 主体、主体 - 集団を作り出すことを苦肉の策として試みようとしていたのがガタリなのだ。ギリシャの悪烈な病院の訪問（デロス島訪問記の『精神病院と社会のはざまで』を思い出すこと）を、イタリアの精神科医師バザーリアの同僚と行った時も、おそらくラ・ボルド病院のように制度を縦横無尽に走らせるような大革命を意図せずに、いろいろな人がいろいろな色の食材を持ち込んで料理のできる台所を作り出そうとしたに違いないという直感が私にはある。

ところでリングスもうまく書けているところがある。「一人暮らしの年老いた女性が、彼女の老猫が一匹のみすばらしい路地をうろつく野良猫とすったもんだの挙句、驚くべきことにいまだ子どもを宿すことができ、子猫を産むのだと語る。彼女は手紙も電話もまったくよこさないカリフォルニア在住の息子がもうすぐやってくるのだと語る。彼女は、自分の母親が時おり夜中に尋ねてくることを語る。わたしは彼女と接触するのは、公的で明確なカテゴリー——女性、夫と死別した、年老いた、オクラホマ生まれ——をとおしてではなく、彼女が自分の物語を語るに耳を傾けることにおいて、笑いと涙をとおして彼女の空想の空間と触れ合うことにおいてなのだ。わたしは、わたしが何者であるか彼女の認識を得たいとか、彼女を理解したいだとか、人生を理解したいなどと思ってそうするわけではない」（『わたしの声』、邦訳、p.139）。ヘーゲルの言うような自己承認のためにこのような語りがあるわけではないとリングスは強く述べている。自分自身の刻み込む誓いのことばに現れるアイデンティティを確定することをヘーゲルは恐れていると（同上）。

と言うことは、ラカンもそうだとということになるだろうか。それにしてもリングスはなぜ老人をはじめマイノリティについてはこのようにうまく話が聞けるのだろうか。そこが彼のまた人類学的職人の技でもあろうが、精神科医の私としては、このような老いから始められることに対してやや疑いがある。これも事例を示す。改訂している。ある30代の男性が新宗教に入信していたが、一時、幻覚妄想状態であったが落ちついた状態になった。その後、筆者が担当したが、そのうち教祖が亡くなった。教祖は老婆であった。だから性的な距離も取れ、落ち着いた人生、教会本部の掃除をするなど地に足のついた生活を送っていたのかもしれない。しかし次の教祖はその患者が結婚できるくらいの年齢となった。その患者の人生の話はかなり聞いてきたつもりであったが、教祖が変わることで一気に誇

大的になり、つまり教祖の夫となる可能性が主治医を含むあらゆる者の魂の浄化をもたらすような勢いになった。どうすればいいのだろうか正直悩んだ。信頼しているあらゆる同僚に考えを聞き、退院してもらおう方向で頭の動きを変えるしかなかった。病院から放置するのではなく、退院を受け入れるのに熱心な地域が幸運にもその患者を受け入れることになった。その患者からは、電話もかかり、魂を磨く石が数回送られてきたが、送り返さずそのままにした。このような形の距離のあるコミュニケーションもありえると考えたのだ。

相手が若返ったのだから距離を老化させる必要があった。

リングスの描写は、ひとりの人が描いたと言うより、対象により変わってしまう。それは上手く変わる時は対象と小集団を作っているとも言えるのだろうが、臨床家から見ると以上のようなある意味のツッコミを入れたいくなるのもまた本当のところであり、このような交流は喜んでくれると信じている。

執筆者について――

三脇康生（みわきやすお） 1963年生まれ。4月1日より京都大学精神神経科客員研究員。専攻＝精神医学。主な著書には、『医療環境を変える 「制度を使った精神療法」の実践と思想』（共編、京都大学学術出版会、2008年）、『臨床の時間 素の時間と臨床』（編著、ナカニシヤ出版、2021年）がある。

水声社の新刊

(2025 / 3 / 31)

【4月の新刊（予定）】

ポップカルチャーからみた日本

《大手前大学比較文化研究叢書》

石毛弓編

【4.2 発売】

▶日本のマンガ、アニメ、ゲームをはじめとするポップカルチャーは、海外でどのように受容され、また、海外の文化からどのような影響を受けているのか。海外のマンガ・アニメ研究者の視点を取り入れつつ、異文化交流をキーワードに、現代日本のポップカルチャーの諸相に迫る。

A5 判上製 / 168 頁 / 2500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0852-6



フロレンスキイ論

細川瑠璃

【4.7 発売】

▶西欧絵画の遠近法と異なる中世イコンの「逆遠近法」を解き明かしたことで知られるロシア正教の司祭フロレンスキイ。その美学・神学・数学的著作を貫く〈形〉、〈不連続性〉、〈個と全の対立〉を巡る思想を明らかにし、二十世紀ロシアの最も謎めいた思想家の全体像に光を当てる、初のモノグラフ。

A5 判上製 / 310 頁+ 4C 別丁 4 頁 / 5000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0862-5



鷹野隆大——カスババ この日常を生きのびるために

東京都写真美術館編

【4.9 発売】

▶ジェンダー、身体、(カスのような) 場所、影…… 〈カスババ〉、〈おれと〉、〈男の乗り方〉といった代表作から、未発表作品まで、第31回木村伊兵衛写真賞受賞作家の全貌に迫る。カラー作品 256 ページ収録! 執筆=鷹野隆大、沢山遼、高嶋慈、伊藤亜紗、遠藤みゆき

A5 判並製 / 360 頁 / 3600 円+税 ISBN : 978-4-8010-0838-0



小説と映画の修辞学【改訳決定版】

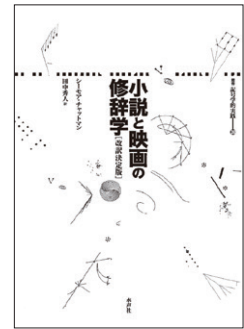
《記号学的実践叢書》

シーモア・チャットマン 田中秀人訳

【4.12 発売】

▶ブース、バルト、ジュネットといった、先行する主要な物語理論家たちを継承する博覧強記の物語学者チャットマンが、「小説」と「映画」における多くの作品を緻密に分析すると同時に、「物語学」における既成のタームを批判的に検討し、さらには「物語学」そのものをも問い直そうとする、画期的実践の書。

A5 判上製 / 349 頁 / 6000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0621-8



美術史とその外側

坂本満

【4.16 発売】

▶影絵、だまし絵、解剖図、民衆版画、二重螺旋階段、ルイ 14 世の戦争ゲーム……こり固まった教養や堅苦しい能書きにしばられず、自由な心で率直に作品と向き合えば、美術史の〈外側〉にも豊かな作品世界が広がっている。古今東西を軽やかに往還する、作品との開かれた出会いへの誘い。

46 判並製 / 392 頁+ 4C 別丁 16 頁 / 3500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0865-6



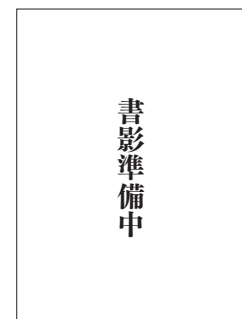
KATSUTOSHI YUASA: IMAGEMAKER

湯浅克俊

【4.18 発売】

▶写真から絵画へ、絵画から木版画へ、木版画からイメージへ。木版画を主要な表現手段としながらも、様々な素材、手法で新たなイメージに挑み続ける湯浅克俊の作品集。

B5 版変型上製 / 260 頁 / 5000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0864-9



【3月の新刊（既刊）】

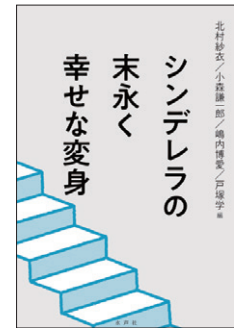
シンデレラの末永く幸せな変身

北村紗衣+小森謙一郎+嶋内博愛+戸塚学編

【3.7 発売】

▶ディズニープリンセスだけじゃない！ 白馬にまたがるシンデレラや、男の子のシンデレラも？ 昔話から、絵画、オペラ、小説、現代映画まで……世界各地で生まれた多様なシンデレラ物語を読み解く。

46 判並製 / 252 頁 / 2200 円+税 ISBN : 978-4-8010-0851-9



落語と学問する

森本淳生+鈴木亘編

【3.7 発売】

▶世の習いに潜むおかしさを明かし聴く者に問いを投げかける落語。言葉と身ぶりが生み出すその融通無碍の世界とともに、文学、美学、映画学、文化人類学、歴史学、パフォーマンス・アーツを介して、考える楽しみへと誘うエッセー集。

46 判並製 / 268 頁 / 2500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0848-9



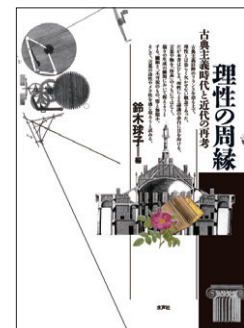
理性の周縁——古典主義時代と近代の再考

鈴木球子編

【3.11 発売】

▶理性による認識を越えるものを、人間はどのように捉えようとしてきたのか。啓蒙に対して反啓蒙を対置することなく、改めて理性を称揚するわけでもなく、近代を推し進めてきた理性主義を再考し、理性の埒外にある豊饒なものを掬い上げる試み。

A5 判上製 / 213 頁 / 4000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0850-2



ロシア・中東欧のエコクリティシズム

——スラヴ文学と環境問題の諸相

小椋彩+中村唯史編

【3.13 発売】

▶ロシア・中東欧の厳しくも豊かな自然は、文学や絵画でどのように描かれているのか。国家や民族の問題が影を落とすスラヴ文学を、地政学や文明論を超えたエコクリティシズムの観点から批評し、新たな読解の枠組を提示する。

A5 判上製 / 376 頁+カラー別丁 8 頁 / 5000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0853-3



韓国現代時調四歌仙集

孫澄鎬・李垞・卞鉉相・鄭熙暻

安修賢編・訳・解説

【3.15 発売】

▶韓国伝統の抒情詩型である「時調」のエッセンスを受け継ぐ四詩人の作品六十四首を対訳で紹介。現代韓国に生きる人々の魂の響きがわれわれを揺さぶる！

46 判並製 / 248 頁 / 2500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0858-8



ザ・プレイ — 流れの彼方

《現代美術スタディーズ》

橋本梓

【3.15 発売】

▶発泡スチロールのイカダで川を下る《現代美術の流れ》。十年も夏ごとに山で落雷を待ち続ける《雷》。一九六〇年代の前衛美術を起点としながら、今やその文脈を遙かに越え、五十年以上活動を続ける特異な集団の全貌を描き出す。

A5 判上製 / 197 頁 / 3500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0857-1



冒険者たち — 特権的文学のすすめ

《水声文庫》

鈴木創士

【3.19 発売】

▶アルトー、ベケット、ジャベス、室伏鴻……言語・身体の極限を追求した「冒険者たち」をめぐる炸裂する二十四のエッセイ。《神聖なる怪物たち……彼らの墓碑銘は砂漠の果てにある。この書物が書かれなかったとしたら、二十世紀は悔恨のままに終わっていたことだろう。》(四方田犬彦)

46 判上製 / 215 頁 / 2500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0861-8



渋沢栄一とフランス

《日仏会館ライブラリー》

— 日仏会館創立百周年記念論集

三浦信孝+矢後和彦編

【3.19 発売】

▶近代日本の制度設計者として多大な功績を残した実業家、渋沢栄一。日仏の経済・文化・学術交流の諸相からその軌跡をダイナミックに描き出し、宗教・倫理・社会思想・外交など、渋沢の複雑かつ多面的な相貌に迫る初の試み。

A5 判上製 / 304 頁 / 4500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0839-7



女性・戦争・植民地 1919-1939

—両大戦間期フランスの表象

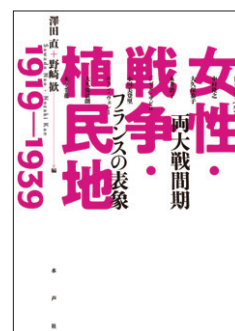
《日仏会館ライブラリー》

澤田直+野崎歎編

【3.26 発売】

▶前衛芸術が花開く一方、植民地問題が前景化する光と陰の時代＝フランス両大戦間期。女性や黒人は諸芸術のなかでいかなる創造をおこない、どのようなイメージのもとに捉えられたのか。十一名の論者により拓かれる歴史への問い。

A5 判上製 / 256 頁 / 4000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0863-2



ポール・リクールの哲学—人間の善き生と想像力

櫻井一成

【3.26 発売】

▶自由、身体、悪、無意識、聖書、神話、隠喩、時間、物語、歴史、法、正義……碩学が残した広大無辺の思索から、フロネシス論、物語的アイデンティティ論、カント美学の系譜を浮き彫りにし、ままたらぬ人生を何度でも構築する方途を探る。

A5 判上製 / 368 頁 / 6000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0849-6



芸術を知らぬ建築家たちへ

—寓話「カリフのデザイン」仕儀

ウィングダム・ルイス 要真理子訳

【3.26 発売】

▶イギリスのヴォーティシズムの牽引者である画家による、現実の変革と生活の刷新を目指す挑発的かつ挑戦的な芸術的主張の書。

46 判上製 / 203 頁 / 2500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0822-9



余白の形而上学—ポール・クローデルと日本思想

大出敦

【3.29 発売】

▶フランス文学史に燦然と輝く詩人は、駐日大使として訪れた異国の地で何を見出したのか。日本というトポスのもと、見えるものと見えないもののあいだに橋を架ける〈媒介者〉のモチーフを手掛かりに、その詩学の核心に迫る。

A5 判上製 / 400 頁 / 6000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0847-2



水声社

東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suisaisha.net

ブックカフェ



本の庭
le Jardin des livres

本の庭



緑と本に囲まれて、憩いのひとときをお過ごしいただける、都内でもまだ緑の多く残る山王のブックカフェ『本の庭』にも春がやってきました。メジロ、キジバト、ヒヨドリも訪れます。『本の庭』では、水声社の本を展示販売しており、新刊は本屋さんの店頭と並ぶより、10日から1週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに、パンケーキやケーキ、など、店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食、焼菓子や各種スイーツやお飲み物をご用意しています。車椅子やベビーカーでお入りいただけます。テラスでは、ワンちゃんと共に過ごすことができます。

【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王1-22-16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅 山王北口より徒歩7分

営業時間：木・金 12時～18時、土・日 11時～18時。ただし第1・第3日曜日（4月6日・4月20日）は12時開店です。

営業日：木・金・土・日（詳しくはInstagramをご確認ください。）

臨時休業：4月24日木曜日は臨時休業です。（詳しくはInstagramをご確認ください。）

TEL：070-4171-0860

店内設備：スロープを設置できますので、車椅子のままご来店いただけます。

Free Wi-Fi



本の庭
le Jardin des livres

(広告)